

## 短歌（二十五）

下田 明美

ちらほらと梅の花咲く中庭に

エノコログサの金の輝き

亀石の最後の坂の左側

宇佐美観音里、手をさし伸べて

大股に坂を上って来る人は

私の友達、東京の人

春一番、深紅の蕾み膨らませ

芍薬が咲く牡丹の花も

窓越しに光が届いた、枕まで

巢雲の山は今日も朝焼け

一粒が百円もするイチゴさん

高齢者には高値のイチゴ

我慢する、よくも我慢ができたもの

電話に出れば押し売りが来た

テレビで見て塩豆食べるポリポリと

寂しいなんていうもんじやない

風貌があまりに変わってしまったと

自分は思うが認めない友

玄関の横で育ったミカンの木

堅い実付けたたったの三つ

甘えたりすねたりすれば良かったの

懐古している独りの老女

桜吹雪、郵便局や消防署

これが宇佐美の目抜き通り

